受動文，非定形節，動詞派生名詞における発音されない項の解釈

島　　越　　郎

1. はじめに

動詞などの述語（predicate）の意味が正しく解釈されるためには，その意味を表す項（argument）と呼ばれる要素が文中に存在しなければならない。例えば，次の文における動詞 discuss の意味が成立するためには，「議論する人」と「議論されるもの」の両方が存在しなければならないが，「議論する人」が主語 We，「議論されるもの」が目的語 these issues として生起している。

（1）　We discussed these issues yesterday.

しかし，（1）とは異なり，動詞の意味を表す項が文中に現れない場合もある。

（2）　a.　These issues were discussed at the meeting.
　　b.　We closed the meeting without discussing these issues.
　　c.　Discussion of these issues produced satisfactory results.

文（1）に対応する（2a）の受動文では，「議論されるもの」が文の主語として生起するが，「議論する人」は表されていない。同様に，（2b）の without により導入される従属節では，「議論されるもの」が生起するが，「議論する人」は生起しない。また，動詞 discuss の派生名詞 discussion が文の主語として生起する（2c）では，「議論されるもの」が前置詞句 of these issues として生起するが，「議論する人」は文中に表現されていない。（2）の文においては，「議論する人」が言語表現として文中には生起しないが，その存在が含意されている。（2a, c）では不特定な人物が，また，（2b）では主節主語 We が「議

論する人」として解釈される。

生成文法では，（2a）の受動文や（2c）の動詞派生名詞における発音されない項を潜在項（implicit argument），（2b）のような時制を持たない非定形節における発音されない項を PRO と呼び，両者を区別して扱う分析が標準的である。本稿では，潜在項と PRO は共に変項（variable）ではあるが，先行詞が決まる部門が異なるという新たな仮説を提案する。具体的には，格（Case）に課せられる条件により，受動文における変項の先行詞は語彙部門で決まり，非定形節と動詞派生名詞における変項の先行詞は統語部門で決まることを主張する。

本稿の構成は次である。2 節では，受動文の潜在項と非定形節内の PRO に見られる特徴について概観する。3 節では，変項の先行詞が語彙部門で決まる過程と統語部門で決まる過程について説明する。4 節では，新たに提案する分析の下で，受動文の潜在項と非定形節内の PRO に見られる共通点と相違点を統一的に説明する。5 節では，本論の分析が，動詞派生名詞における潜在項の特徴についても説明できることを論じる。6 節は纏めとなる。

2. 受動文の潜在項と非定形節の PRO に見られる特徴

先ずは, 受動文の潜在項と非定形節の PRO に見られる共通点を見てみよう。両者共に, 再帰代名詞（reflexive）の先行詞として機能する。

（3）　a.　Damaging testimony is sometimes given about oneself.

（Chomsky（1986：119））

b.　Such privileges should be kept to oneself.

（Baker, Johnson and Roberts（1989：228））

c.　Asparagus should never be cooked for just oneself.

（Reinhart（2016：8））

（4）　a.*　John showed Mary to themselves.

b.　John persuaded/proposed to Mary to get themselves a new car.

（Landau（2013：58））

(3) の受動文では，潜在項の動作主が再帰代名詞 oneself の先行詞として解釈される。例えば，(3c) では，文中に生起しない動詞 cook の動作主が oneself の先行詞となり，「アスパラガスは自分自身のためだけに調理すべきではない」と解釈される。また，(4a) の非文法性は，再帰代名詞 themselves が主語 John と目的語 Mary を同時に先行詞に取ることができないことを示す。この事実を踏まえると，(4b) の文法性は，主節動詞 persuade や propose の目的語である不定詞節内の動詞 get の発音されない動作主 PRO が themselves の先行詞となり，PRO が John と Mary を先行詞に取ることが分かる。[1]

また，受動文の潜在項も非定形節の PRO も，非定形節の PRO の先行詞として機能する。

(5) a. It is time [PRO_1 to sink the boat [PRO_2 to collect the insurance]].
b. The ship was sunk [PRO to collect the insurance].
(Chomsky (1986 : 119))

文 (5a) では，仮主語 it に対応する不定詞節内に動詞句 sink the boat の目的を表す不定詞節が生起している。動詞 sink の動作主 PRO_1 が，動詞 collect の動作主 PRO_2 の先行詞として解釈される。また，(5b) の受動文では，潜在項である動作主が不定詞節内の動詞 collect の動作主 PRO の先行詞として解釈される。[2]

次に，潜在項と PRO の相違点を見てみよう。先ず，非定形節内の PRO は二次述語の主語として機能するが，受動文の潜在項は機能しない。

(6) a. They expected [PRO to leave the room angry].
b.* The room was left angry.
(Chomsky (1986 : 121))

文 (6a) では，不定詞節内の二次述語 angry が不定詞節の主語である PRO と叙述関係を形成し，PRO が主節主語の They を先行詞に取る。他方，(6b) の非文法性は，潜在項である動作主が二次述語 angry と叙述関係を形成できないことを示す。[3]

また，非定形節内の PRO とは異なり，受動文における潜在項は主節の主語によりコントロールされない。

（7）　a.　They expected［PRO to give damaging testimony］.
　　b.*　They expected［damaging testimony to be given］.
（Chomsky（1986：119））

文（7b）の非文法性は，この文が（7a）とは同じ意味を持たないことを示す。つまり，（7a）の不定詞節内の動作主である PRO は主節主語の they として解釈できるが，（7b）の不定詞節内における受動態の潜在項は主節主語の they としては解釈できない。（7b）では，動詞 give の動作主は不特定な人物として解釈される。[4]

更に，受動文の潜在項と非定形節内の PRO の解釈の違いは，次の用例においても見られる。

（8）　a.　Organizing the workers（took place）before raising salaries.
　　b.　Destroying the work environment before reorganizing the workforce makes no sense.
　　c.　Beating the bicycle rider while filming him is really clever.
（9）　a.　The workers had to be organized before salaries could be raised.
　　b.　The work environment had be destroyed before the reorganization of the workforce was attempted.
　　c.　The bicycle rider was beaten while he was being filmed.
（Borer（2013：183））

同一文内に 2 つの非定形節を含む（8）では，それぞれの非定形節内の動作主である PRO は不特定ではあるが，同一の人物として必ず解釈される。例えば，（8c）では，「自転車に乗った人を殴る人」と「その人を撮影する人」が同一人物として必ず解釈される。他方，受動態が主節と従属節の両方に生起する（9）では，主節の動作主と従属節の潜在項である動作主は同一の人物として解釈される必要はない。例えば，（9c）において，「自転車に乗った人を殴る人」と「その人を撮影する人」は，異なる不特定な人物として解釈できる。

このように，受動文の潜在項と非定形節内の PRO には共通点と相違点が見られる。次節では，潜在項と PRO は共に変項であると仮定し，変項の先行詞を決める解釈条件

を提案する。

3.　変項に課せられる解釈条件

受動文や中間構文における潜在項の解釈を説明するために，Reinhart（2016）では語彙部門における Saturation と呼ばれる操作が仮定されている。この操作により，動作主等の意味役割を担う外項に存在閉包（Existential Closure）が適用される。例えば，動詞 wash の外項である θ_1 に存在閉包が適用される場合，（10a）は（10b）となる。

（10）　a.　wash（θ_1, θ_2）

b.　Saturation : $\exists$ x（wash（x, θ_2））

（Reinhart（2016 : 6））

Reinhart の分析では，存在量化詞（Existential Quantifier）により束縛された変項は統語部門に投射されない。本稿では，Reinhart の分析と異なり，意味計算を行う意味解釈部門（Logical Form : LF）において Saturation を受けた変項が統語構造上に存在しなければならないと考え，語彙部門において存在量化詞により束縛される変項は外項を導入する軽動詞（vP）の主要部に投射されると仮定する。

また，変項は必ず語彙部門において存在量化詞に束縛されるわけではなく，存在量化詞に束縛されない変項も存在すると仮定する。この場合，変項は存在量化詞に束縛されない状態で統語部門に投射され，変項の解釈はそれが生じる統語環境により決まる。具体的には，語彙部門で束縛されない変項の解釈は，Chomsky（2001）が提案する統語構造の構築を規制するフェイズ条件に従って次のように決まると提案する（島（2018, 2019, 2020））。

（11）　変項は，同一の転送領域内に変項を束縛する要素 A が存在する場合，A の変項として解釈される。同一の転送領域内に変項を束縛する要素が存在しない場合，その値は未指定となる。

この条件によると，変項の値は派生のできるだけ早い段階で統語構造に基づいて決まる

が，派生の途中で値が決まらない変項については派生の最後の段階で値が決まる。

条件（11）における転送領域については，CP と vP 構造が構築された段階で，それぞれのフェイズ主要部である CP 主要部と vP 主要部の補部にある TP と VP 構造が転送領域を形成する。但し，全ての CP と vP がフェイズを形成するわけではなく，次の CP と vP についてはフェイズを形成しないと仮定する。

（12）　非定形節を形成する CP と外項を指定部に投射しない vP はフェイズではない。

この仮定の下では，定形節の CP と外項を指定部に投射する vP がフェイズを形成する。

以上の点を踏まえて，以下の受動文の派生を見てみよう。

（13）　These issues were discussed at the meeting.

語彙部門において他動詞 discuss の外項に Saturation が適用した場合，動詞 discuss の外項は vP 主要部に投射される（以下，外項が投射した vP 主要部を v* として表す）。その結果，（13）は派生の段階で次の構造を持つ。

（14）　$[_{vP}$ v* $[_{VP}$ discuss these issues at the meeting$]]$

この構造における vP は外項を指定部に投射していないため，フェイズを形成しない。また，指定部を投射しない vP 主要部 v* には，対格素性が存在しない。（Jaeggli（1986），Baker, Johnson and Roberts（1989））。その後，CP 構造が作られると，次の構造が派生する。

（15）　$[_{CP}$ C $[_{TP}$ these issues$_1$ were$_2$ $[_{VP}$ t$_2$ $[_{vP}$ v* $[_{VP}$ discuss t$_1$ at the meeting$]]]]]$

この構造では，v* には対格素性が存在しないため，動詞 discuss の内項 these issues には対格が付与されない。そのため，these issues は VP 補部から TP 指定部へ移動し，主格が付与される。また，TP と vP の間に基底生成された助動詞 be が TP 主要部へ移動

する。（15）の CP は定形節であり，フェイズを形成する。その結果，CP 主要部の補部である TP が LF と PF に転送される。PF では，外項が投射した v* が受動形態素 -ed として具現化し，動詞 discuss に付加する。この派生は適確な派生である。

他方，語彙部門における Saturation が動詞の外項に適用しない場合，（13）は派生の段階で次の構造を持つ。

（16）　$[_{vP}$ x v $[_{VP}$ discuss these issues at the meeting$]]$

この構造では，動詞 discuss の内項 these issues が VP 補部に投射され，外項は vP 指定部に投射されている。vP 主要部の対格素性は, 内項の these issues に付与される。また，外項が指定部に投射されているため，（16）の vP はフェイズを形成し，vP 指定部の補語である VP は PF と LF に転送される。その後，CP 構造が作られると，次の構造が派生する（転送された VP 領域を取消線で示す）。

（17）　$[_{CP}$ C $[_{TP}$ __ were$_2$ $[_{VP}$ t$_2$ $[_{vP}$ x v ~~$[_{VP}$ discuss these issues at the meeting$]$~~$]]]]$

この構造における CP は定形節であり，TP 主要部は主格素性を持つ。しかし，変項には格素性が無いため，主格は vP 指定部の変項に付与できない。そのため，（17）の構造は許されない。このように，受動文においては，外項の変項に語彙部門での Saturation が適用した派生しか許されない。

次に，非定形節を含む次の文の派生を見てみよう。

（18）　We closed the meeting without discussing these issues.

語彙部門において他動詞 discuss の外項に Saturation を適用した場合，（18）の副詞節は次の構造を持つ。

（19）　$[_{vP}$ v* $[_{VP}$ discuss these issues at the meeting$]]$

この構造では，外項は vP 主要部に投射される。指定部を投射しない v* には対格素性

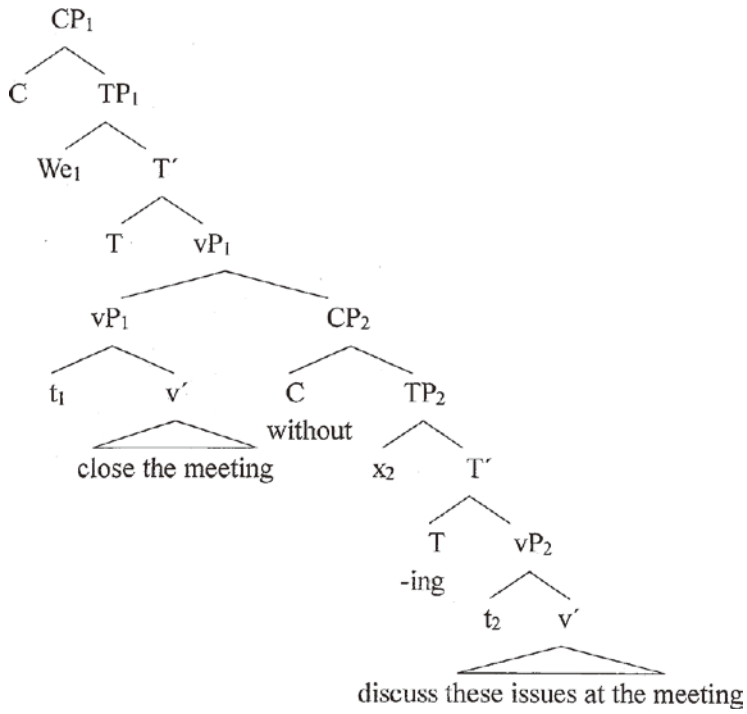
が無く，内項である these issunes には対格が付与されない。その後の派生においても，these issunes には格が付与されず，適確な構造が派生しない。

他方，語彙部門での Saturation を他動詞 discuss の外項に適用しない場合，（18）は派生の段階で次の構造を持つ。

（20）　$[_{vP}$ x v $[_{VP}$ discuss these issues at the meeting$]]$

この構造では，動詞 discuss の外項は vP 指定部に投射される。そのため，v の対格素性は内項の these issunes に付与される。vP は指定部を投射するため，フェイズを形成する。その結果，（20）の VP が LF と PF に転送される。その後の派生の段階で，次の構造が派生する。

（21）



この構造では，非定形節を形成する CP_2 が主節 vP_1 に付加し，主節主語の we が主節の vP_1 指定部から TP_1 指定部へ移動する。また，CP_2 内において，動詞 discuss の外項である変項 x が TP_2 主要部の EPP 素性を満たすために vP_2 指定部から TP_2 指定部へ移動する。フェイズを形成する CP_1 主要部の補部である TP_1 が LF と PF への転送される。変項に課せられる（11）の解釈条件によると，（21）の変項 x を束縛する要素は主節主語の we である。その結果, 従属節内の動名詞の主語は, 主節主語 we として解釈される。このように，（18）の派生においては，語彙部門における Saturation が適用しない派生のみが許される。

最後に，不定詞節内の動詞が受動化された文の派生を見てみよう。

（22）　John tried to be introduced to Mary.

不定詞節内の動詞 introduce に対しては，外項と内項の両方に変項が導入されている。外項の変項は語彙部門において Saturation の適用を受け，存在量化詞に束縛され，vP 主要部に投射される。他方，内項の変項には Saturation が適用されず，VP 補部に投射される。その結果，派生の段階で，（22）は次の構造を持つ。

（23）　$[_{vP}$ v* $[_{VP}$ introduce x to Mary$]]$

この構造では，指定部を投射しない v* は内項の変項に対格を付与しない。その後，（23）は派生の段階で（24）の構造を持つ。

（24）　$[_{vP1}$ John v $[_{VP1}$ try $[_{CP}$ C $[_{TP}$ x_1 to be $[_{vP2}$ v* $[_{VP2}$ introduce t_1 to Mary$]]]]]]$

この構造では，変項 x が動詞 introduce の補部から不定詞節を形成する TP 指定部へ EPP 素性を照合するために移動する。（24）における vP1 がフェイズを形するため，主節の VP1 が LF と PF への転送される。その結果，次の LF 構造が派生する。

（25）　$[_{VP1}$ try $[_{CP}$ C $[_{TP}$ x_1 to be $[_{vP}$ v* $[_{VP2}$ introduce t_1 to Mary$]]]]]$

解釈条件（11）によると，（25）において変項 x を束縛する要素が存在する場合，x の値が決まる。この場合，主節動詞 try が選択する CP 主要部が変項 x を束縛すると仮定する（Kratzer（2009））。その結果，CP 全体が λx.［x be introudced to Mary］という一項述語として解釈される（Clark（1990））。CP 自体は主節動詞 try の補部に生起するため，try の語彙特性により，この一項述語の主語は主節主語の John として解釈される（Chierchia（1989））。

このように，不定詞節内の動詞の外項である変項に Saturation が適用し，内項の変項が VP 補部に投射されることにより，（22）の文が派生する。これ以外の派生は許されない。例えば，不定詞節内の動詞の外項が vP 指定部に投射した場合，（22）は次の構造を持つ。

（26）　$[_{vP}$ x v $[_{VP}$ introduce x to Mary$]]$

この構造では，指定部を投射する vP 主要部には対格素性が存在する。しかし，その対格素性は内項の変項に付与することが出来ない。そのため，対格素性が照合されず，派生が破綻する。また，外項と内項の両方が語彙部門における Saturation を受けた場合，（22）は次の構造を持つ。

（27）　$[_{vP}$ v* $[_{VP}$ introduce* to Mary$]]$

この構造では，introduce* が内項に対して Saturation が適用されていることを示している。そのため，外項と内項の両方が統語構造に投射しない。この場合，vP 主要部には対格素性が無いため格照合の問題は生じない。しかし，その後の段階で，不定詞節を形成する TP 指定部を埋める要素が存在しない。

（28）　$[_{vP}$ John v $[_{VP}$ try $[_{CP}$ C $[_{TP}$ ____ to be $[_{vP}$ v* $[_{VP}$ introduce* to Mary$]]]]]]$

そのため，外項と内項の両方が語彙部門における Saturation を受ける派生も許されない。その結果，外項の変項に Saturation が適用し，内項の変項が VP 補部に投射される派生のみが許される。

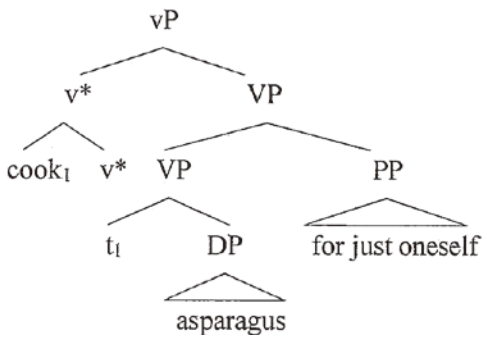
以上，本稿の分析によると，受動文における潜在項と非定形節における PRO は共に変項であるが，前者は語彙部門での Saturation を受け vP 主要部に投射され，後者は Saturation の適用を受けず vP 指定部に投射される。次節では，この分析の下で，受動文の潜在項と非定形節の PRO の共通点と相違点を説明する。

4.　受動文の潜在項と非定形節の PRO が示す共通点と相違点の説明

先ずは，潜在項と PRO が共に再帰代名詞の先行詞となる事実を考えてみよう。本稿の分析によると，（29a）（＝(3c)）は派生の段階で（29b）の構造を持つ。

（29）　a.　Asparagus should never be cooked for just oneself.

b.



構造（29b）では，語彙部門における Saturation が適用した動詞 cook の外項は，変項として vP 主要部 v* に投射する。また，動詞 cook は vP 主要部に移動している。再帰代名詞 oneself を含む前置詞句が VP に付加されると仮定すると，動詞 cook の外項が投射した vP 主要部は oneself を束縛する。

また，不定詞節の主語である PRO が再帰代名詞の先行詞となる（30a）（＝(4b)）は，派生の段階で（30b）の構造を持つ。

（30）　a.　John persuaded/proposed to Mary to get themselves a new car.

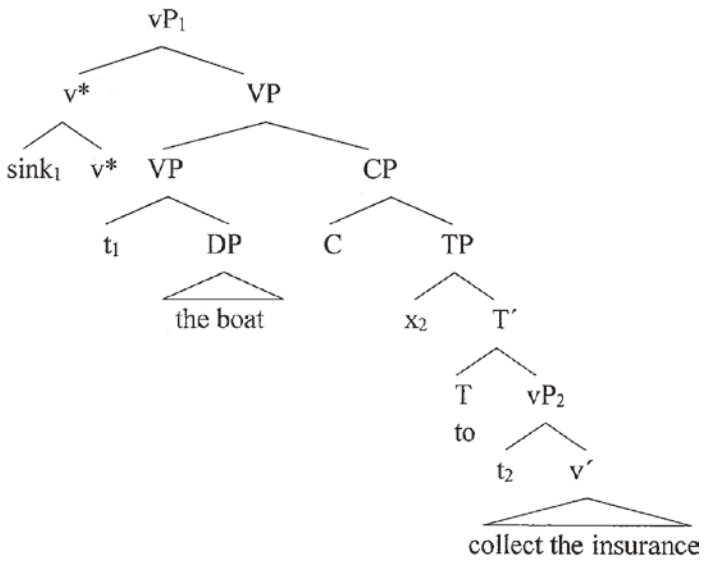
b.　$[_{vP}$ John $[v + \text{persuade/propose}_2]$ $[_{VP}$ to Mary $[_{V'}$ t_2 $[_{CP}$ C $[_{TP}$ x_1 to $[_{vP}$ t_1 v $[_{VP}$ get themselves a new car$]]]]]]]$

構造（30b）の不定詞節内では，動詞 get の外項である変項が vP 指定部に投射され，不定詞節内の TP 主要部の EPP 素性を満たすために TP 指定部へ移動する。また，主節においては，VP 指定部に前置詞句 to Mary が生起し，VP 主要部が前置詞句を跨いで上位の vP 主要部へ移動する。vP 指定部には主節主語の John が生起する。主節 vP がフェイズを形成し，vP 主要部の補部にある VP が LF と PF に転送される。LF では，不定詞節の TP 指定部に移動した変項を CP 主要部が束縛する。その結果，CP 全体が λx.［x get themselves a new car］という一項述語として解釈される。CP 自体は主節動詞 persuade/propose の補部に生起するため，その語彙特性により，この一項述語の主語は主節の John と Mary として解釈される。このように，潜在項と PRO は束縛代名詞の先行詞として機能する。

潜在項と PRO が共に PRO の先行詞になる場合も同様に説明できる。本稿の分析によると，（31a）（＝（5b））は派生の段階で（31b）の構造を持つ。

（31）　a.　The ship was sunk to collect the insurance.

b.



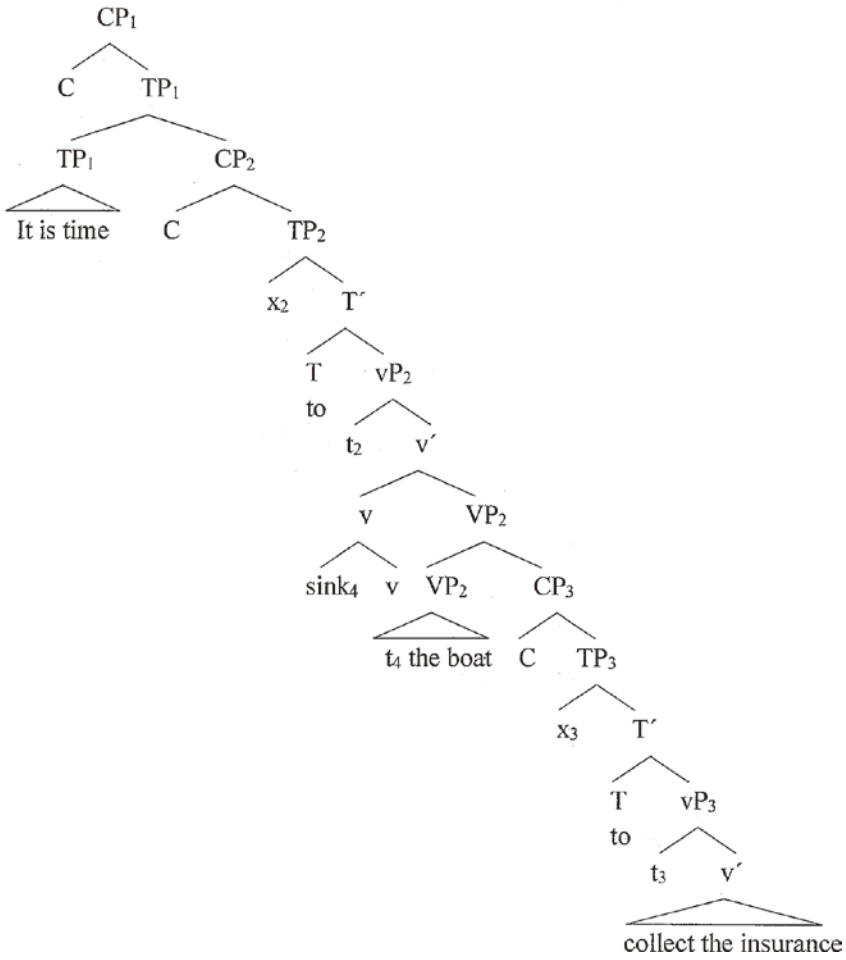
構造（31b）において，主節動詞 sink の動作主である変項は語彙部門における Saturation の適用を受け，vP_1 主要部に投射される。また，不定詞節内の動詞 collect の動作主である変項は，vP_2 指定部に投射され，TP 指定部に移動する。不定詞節が主節の VP に

付加していると仮定すると，主節の v* は不定詞節内の TP 指定部へ移動した変項を束縛する。その結果，動詞 sink と collect の動作主は同一人物として解釈される。

また，不定詞節の主語である PRO が別の PRO の先行詞となる（32a）（=（5a））は，派生の段階で（32b）の構造を持つ。

（32）　a.　It is time［PRO_1 to sink the boat［PRO_2 to collect the insurance］］.

b.



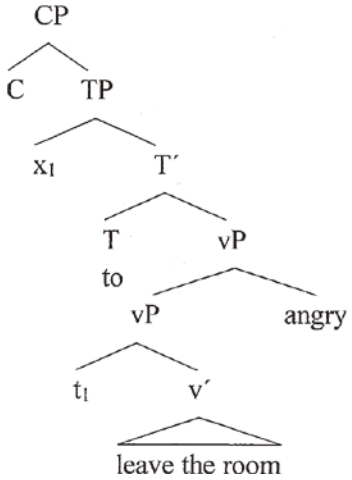
構造（32b）では，目的を表す不定詞節 CP_3 内において，動詞 collect の外項である変項 x_3 が vP_3 指定部から TP_3 指定部に移動する。また，CP_3 自体が不定詞節 TP_2 内の動詞句 sink the boat の VP_2 に付加している。不定詞節 TP_2 においては，動詞 sink の外項であ

る変項 x_2 が vP_2 指定部から TP_2 の指定部に移動する。その結果，動詞 sink の外項である変項 x_2 が動詞 collect の外項である変項 x_3 を束縛する。更に，不定詞節 CP_2 全体が主節の TP_1 に付加する。主節の CP_1 はフェイズを形成するため，CP_1 主要部の補部にある TP_1 は CP_2 と共に LF と PF に転送される。LF において，TP_1 に対して存在閉包が適用し，変項 x_2 は潜在的な存在量化詞により束縛される。その結果，変項 x_2 が束縛する不定詞節 CP_3 内の変項 x_3 も同一の存在量化詞により束縛され，（32a）における 2 つの不定詞節内の主語は同一の恣意的解釈を持つ。

次に，潜在項と PRO の相違点について説明する。先ずは，二次述語に関する違いを見てみよう。本稿の分析によると，（33a）（＝(6a)）の不定詞節 CP は（33b）の構造を持つ。

（33）　a.　They expected [$_{CP}$ to leave the room angry].

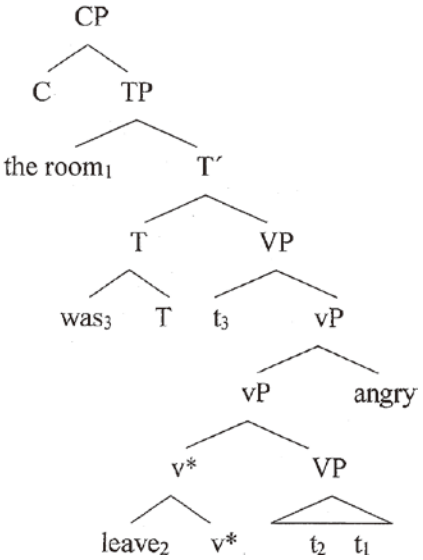
b.



構造（33b）では，不定詞節の TP 主要部の EPP 素性を満たすために，動詞 leave の外項である変項が vP 指定部から TP 指定部に移動する。vP に付加した二次述語 angry は移動元の vP 指定部にある変項の痕跡を構成素統御し，また，移動先の TP 指定部にある変項から構成素統御される。その結果，変項 x と angry は互いに構成素統御の関係にあり，両者は叙述関係にある。他方，（34a）（＝(6b)）の受動文は（34b）の構造を持つ。

（34）　a.* The room was left angry.

b.



構造（34b）では，動詞 leave の外項である変項が語彙部門における Saturation を受け，vP 主要部に投射する。また，（33b）と同様に，二次述語の angry は vP に付加している。TP 指定部には目的語の the room が移動する。angry は外項が投射した v* を構成素統御するが，v* は angry を構成素統御しない。その結果，動詞 leave の外項と二次述語 angry は互いに構成素統御の関係にはなく，両者は叙述関係にはない。そのため，（34a）は非文となる。

次に，受動文の潜在項と非定形節の PRO の違いを示す（35）（＝(7)）の対比を考えてみよう。

（35）　a.　They expected［PRO to give damaging testimony］.

b.　They expected［damaging testimony to be given］.

文(35a)の不定詞節内の動作主である PRO は主節主語の they として解釈できるが，(35b)の不定詞節内における受動態の潜在項は主節主語の they としては解釈できない。本論の分析によると，（35a）では，不定詞節内の TP 主要部の EPP 素性を照合するために，動詞 give の外項である変項は不定詞節内の vP 指定部から TP 指定部に移動する。移動

先において，変項は主節動詞 expect が選択する CP の主要部により束縛される。その結果，不定詞節である CP 全体が λx.［x give damaging tesimony］という一項述語として解釈される。主節動詞 expect の語彙特性により，この一項述語の主語は主節主語の they として解釈される。他方，不定詞節内が受動態である（35b）では，動詞 give の外項である変項に Saturation が適用し，変項は不定詞節内の vP 主要部に投射される。vP 主要部に投射された外項の変項は，TP 指定部に移動した the president や主節動詞 want が選択する CP の主要部からは束縛されない。なぜなら，外項は語彙部門における Saturation により既に存在量化詞により束縛されているためである。その結果，（35b）における動詞 give の動作主は不特定な人物として解釈され，主節主語の they としては解釈されない。

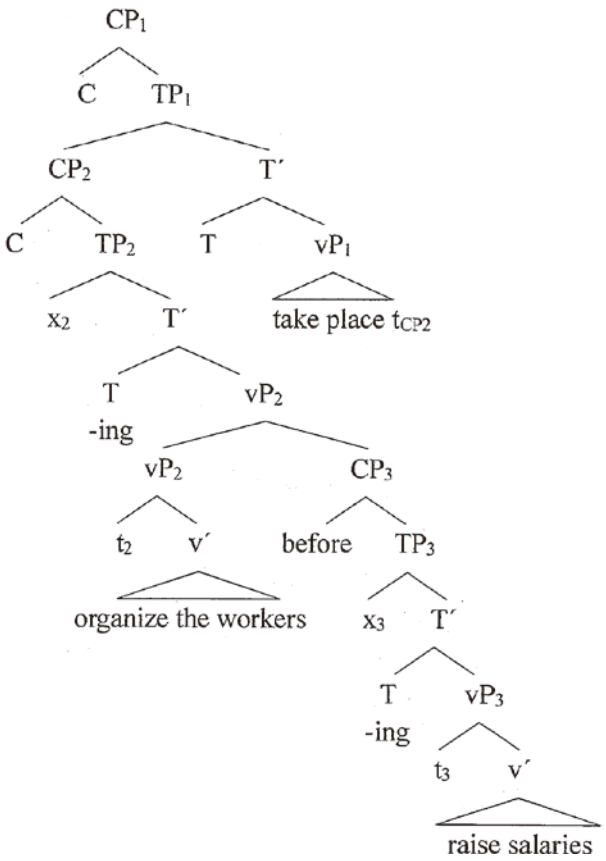
最後に，受動文の潜在項と非定形節の PRO に見られるもう一つの違いを見てみよう。

（36）　a.　Organizing the workers（took place）before raising salaries.　（＝（8a））
　　b.　The workers had to be organized before salaries could be raised.
（＝（9a））

本稿の分析によると，主節と従属節の両方が受動態である（36b）では，主節の動詞 organize と従属節の動詞 raise のそれぞれの外項である変項が語彙部門における Saturation の適用を受け，vP 主要部に投射される。それぞれの動詞の動作主は語彙部門において別々の存在量化詞により束縛されているため，これらの動作主は同一人物である必要はなく，別々の人物として解釈することができる。

他方，（36a）は派生の段階で次の構造を持つ。

(37)



この構造では，接続詞 before により導入される非定形節 CP_3 が，もう一つの非定形節 CP_2 内の vP_2 に付加している。それぞれの不定詞節内において外項である変項 x_2 と x_3 が vP 指定部から TP 指定部に移動する。CP_2 自体は動詞 take place の内項として基底生成され，TP_1 指定部に移動する。CP_1 がフェイズを形成するため，CP_1 主要部の補部に位置する TP_1 が PF と LF に転送される。LF では，存在閉包により導入された 1 つの存在量化詞が TP_1 に適用し，動詞 organize と raise の動作主である変項 x_2 と x_3 を同時に束縛するため，これらの動詞の動作主は同一人物として解釈される。また，PF では，移動の元位置には移動要素のコピーが残されると仮定すると，次の構造が派生する。

(38)　[$_{TP}$ [$_{CP}$ organizing the workers before raising salaries] T [$_{vP}$ v take place [$_{CP}$ organizing the workers before raising salaries]]]

この PF 構造では，移動先の TP 指定部と移動元の vP 内には同一の CP 構造が生起しているが，移動先では CP 内の organizing the workers が発音され，また，移動元では before raising salaries が発音されることにより，（36a）の語順が派生する。このように，本論の分析は（36a, b）にみられる潜在項と PRO の解釈の違いを説明できる。

5.　動詞派生名詞における動作主の解釈

本節では，動詞から派生した名詞における発音されない動作主について考える。動詞派生名詞における発音されない動作主は，受動文の潜在項や非定形節の PRO と同様，目的を表す不定詞節の主語 PRO の先行詞として機能する。

（39）　a.　the eating of meat to gain weight

（Roeper（1987：268））

b.　the taking of drugs to become happy

（Roeper（1987：277））

c.　the use of drugs to go to sleep

（Alexiadou, Anagnostopoluso and Schäfer（2015：142））

（39a）では，動詞 eat から派生した名詞句 the eating of meat には，「食べられるもの」が前置詞句 of meat として生起しているが，動作主である「食べる人」は生起していない。しかし，生起しない動作主が，名詞句を修飾する不定詞節内の動詞 gain の動作主と一致し，名詞句全体が「体重を増やすために肉を食べること」として解釈される。

このように，動詞派生名詞の発音されない動作主には，受動文の潜在項や非定形節の PRO と同じ特徴が見られる。他方，動詞派生名詞の発音されない動作主は，受動文の潜在項とは異なる振る舞いも示す。

（40）　a.　John wants Mary to be seen.

b.　Marc Antony is bent on the complete destruction of his enemies.

（Bruening（2013：19–20））

2 節でも見たように，（40a）の受動文における潜在項は不特定な人物として解釈され，文中の John や Mary を先行詞とすることが出来ない。これに対して，（40b）における動詞派生名詞 destruction の発音されない動作主は，主節主語の Marc Antony として解釈できる。[5] この点において，動詞派生名詞の動作主は不定詞節の主語と同じ特徴を示す。

しかし，動詞派生名詞の動作主は，不定詞節の PRO とも異なる振る舞いを示す。

（41）　a.　To organize the labor force entails to raise salaries.
　　b.　Handling in assignments late entails awarding bad grades.
（42）　a.　The organization of the labor force entails the raising of salaries.
　　b.　The handling in of assignments late entails the awarding of bad grades.
（Borer（2013：182-183））

動詞 entail の主語と目的語の両方に非定形節が生起する（41）では，それらの非定形節内の動詞の動作主は不特定ではあるが，同一の人物として解釈される。例えば，（41a）では，「労働力を組織する人」と「給料を上げる人」が同一人物として解釈される。他方，動詞派生名詞が動詞 entail の主語と目的語である（42）では，それぞれの動作主は異なる人物として解釈される。この特徴は，受動文の潜在項と同じ特徴である。

このように，動詞派生名詞における発音されない動作主の解釈は，受動文の潜在項や非定形節の PRO とは異なる振る舞いを示す。以下では，発音されない項は変項であると仮定する本稿の分析の下で，動詞派生名詞，受動文，非定形節に見られる共通点と相違点を説明する。先ず，動詞派生名詞の派生に関して，語彙部門ではなく，統語部門で形成されると仮定する（Alexiadou（2001, 2009），Borer（2013），Fu, Roeper and Borer（2001））。具体的には，動詞派生名詞には vP と VP から成る動詞句構造が含まれ，VP 主要部が vP 主要部を経由し，上位の名詞を造り出す接尾辞（noun-forming suffix）に統語部門で主要部移動することにより形成されると考える。名詞接尾辞自体は名詞的特徴を持ち，主要部移動により付加された vP 主要部の対格素性を吸収することにより認可される。また，名詞接尾辞を選択する決定詞（determiner）はフェイズを形成すると仮定する（Citko（2014））。

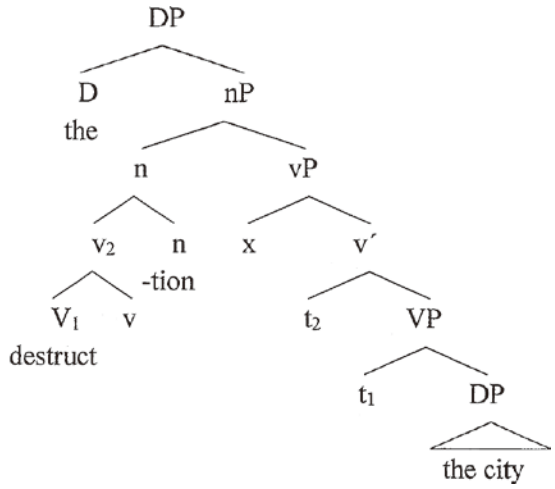
以上の仮定の下，（43a）の動詞派生名詞の派生を見てみよう。（43a）は，派生の段階で（43b）の構造を持つ。

（43）　a.　the destruction of the city

b.　$[_{vP}$ x $[_{v}$ destruct$_1$+v$]$ $[_{VP}$ t$_1$ the city$]]$

構造（43b）では，動詞 destruct の外項である変項 x が vP 指定部に，また，内項の the city が VP 補部にそれぞれ投射する。また，指定部を持つ vP はフェイズを形成し，the city を含む VP が転送される。その後，（43b）に名詞接尾辞 n（-tion）が導入され，動詞 destruct と vP 主要部の複合体が接尾辞 n に主要部移動する。更に，決定詞 D（the）が導入され，次の構造が派生する。

（44）



この構造において，フェイズを形成する DP 主要部の補部である nP が LF と PF に転送される。PF では，格が付与されていない the city が nP 主要部に隣接するため，of the city として具現化する。また，LF では，vP 指定部に生起する変項 x を束縛する要素は存在しない。その結果，変項 x は自由変項となる。この派生は適確な派生である。

一方，変項が語彙部門で Saturation の適用を受け，vP 主要部に具現化した場合，（43a）の構造は派生の段階で次の構造を持つ。

（45）　$[_{vP}$ $[_{v}$ destruct$_1$+v*$]$ $[_{VP}$ t$_1$ the city$]]$

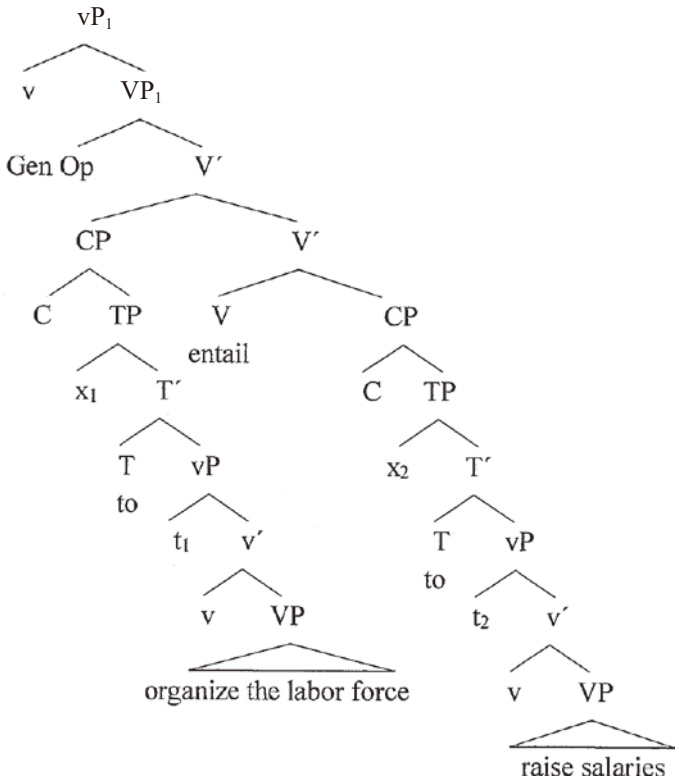
この構造では，動詞 destruct の外項が vP 主要部に投射されている。この場合，v* は指

定部を投射せず，対格素性は持たない。その結果，その後の派生において導入される名詞接尾辞に与えられる格が存在せず，この派生は破綻する。このように，動詞派生名詞における外項の変項には語彙部門での Saturation が適用されない。

本稿の提案する動詞派生名詞の構造の下で，動詞派生名詞における発音されない動作主の解釈がどのように説明されるかを見てみよう。先ず，動詞派生名詞における発音されない動作主は，受動文の潜在項や非定形節の PRO と同様，目的を表す不定詞節の主語である PRO の先行詞として機能することを示す（39）を考えてみよう。本論の分析によると，（44）が示すように，名詞接尾辞が選択する vP の指定部には変項が生起する。この変項が不定詞節内の主語である変項を束縛することにより，動詞派生名詞の意味上の主語が不定詞節の主語と同一となる解釈が保証される。次に，動詞派生名詞の発音されない動作主が主節主語として解釈される（40b）を見てみよう。受動文の変項とは異なり，動詞派生名詞における外項の変項には語彙部門での Saturation が適用されないため，動詞派生名詞の変項の先行詞は統語部門で決まる。（40b）では Marc Antony が destruction の変項を束縛することにより変項の先行詞となる。

最後に，動詞派生名詞と不定詞節における発音されない動作主の解釈の違いを示す（41-42）を考えてみよう。本稿の分析によると，（41a）は次の構造を派生の段階で持つ。

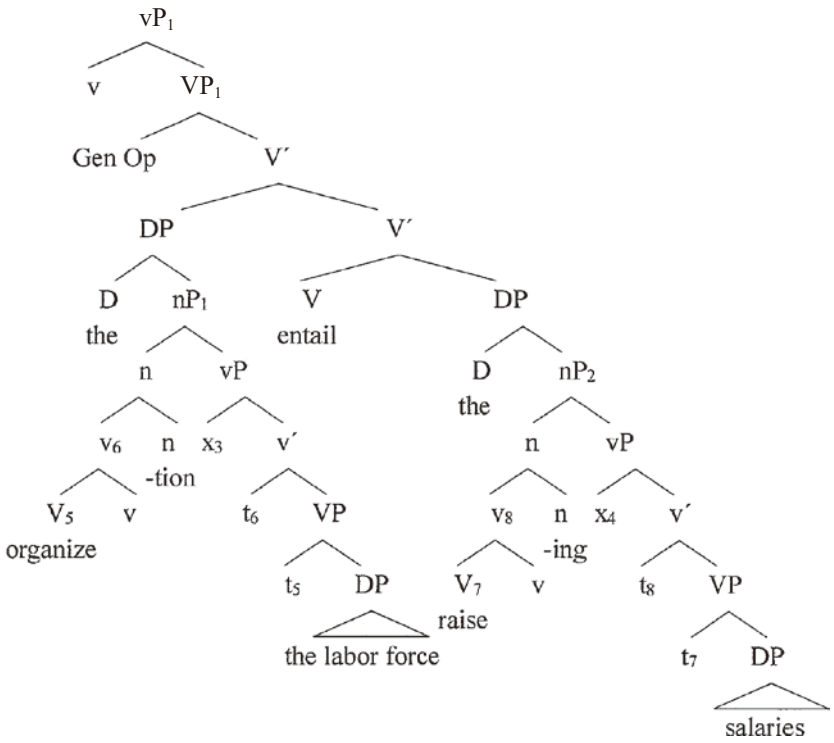
（46）



この構造では，動詞 entail の目的語である不定詞節が VP_1 主要部の補部に，また，主語の不定詞節が下位の VP_1 指定部に基底生成されている。上位の VP_1 指定部には，entail の語彙特性により，総称演算詞 Generic Operator（Gen Op）が生起する。entail が選択する CP の主要部は TP 指定部の変項を束縛しないと仮定すると，フェイズである vP_1 主要部の補部に位置する VP_1 全体が LF と PF に転送される際に，Gen Op が 2 つの不定詞節内の変項を同時に束縛する。その結果，2 つの不定詞節の動作主が同一人物として解釈される。

他方，（42a）は次の構造を派生の段階で持つ。

（47）



この構造では，（46）と同様，最上位の vP_1 がフェイズを形成する。また，動詞 entail の補部と下位の指定部に生起する名詞句 DP もフェイズを形成する。そのため，DP 主要部の補部である nP_1 と nP_2 がそれぞれ別々に LF と PF へ転送される。転送後の LF において，nP_1 と nP_2 に別々の存在量化詞が適用した場合，nP_1 と nP_2 内の変項 x_3 と x_4 は異なる人物を意味することができる。その結果，動詞派生名詞が動詞 entail の主語と目的語である（42a）では，それぞれの動作主は異なる人物として解釈される。

6. ま　と　め

本稿では，受動文，非定形節，動詞派生名詞に見られる発音されない項の解釈について考察した。これらの表現に見られる発音されない項は全て変項ではあるが，変項の先行詞が決まるレベルが異なることを提案した。具体的には，格に課せられる条件により，受動文における変項の先行詞は語彙部門で決まり，非定形節と動詞派生名詞における変項の先行詞は統語部門で決まる。また，変項の先行詞が統語部門で決まる場合，統語構

造の構築に課せられるフェイズ条件が変項の先行詞の決定に重要な役割を担う。具体的には，非定形節を形成する CP はフェイズを形成しないが，名詞句を形成する DP はフェイズを形成すると仮定することにより，非定形節と動詞派生名詞における発音されない項の解釈の違いを説明した。

注

* 本稿の一部は日本学術振興会科学研究費補助金（基礎研究（C）課題番号 20K00657）の援助を受けている。

1） 但し，相互代名詞 each other については違いが見られる。不定詞節内の PRO は each other の先行詞にもなるが，受動文の潜在項はなれない。

（i） a. They decided (that it was about time) [PRO to hit each other].
b.* Damaging testimony is sometimes given about each other.
（Chomsky（1986：119））

2） 目的を表す不定詞節以外においても，潜在項は PRO の先行詞となる。

（i） a. The game was played wearing no shoes.
b. The president was elected without considering his competence.
（Roeper（1987：297））

（ii） The potatoes will be peeled after boiling them.
（Reinhart（2016：8））

これらの文では，受動文の潜在項がその後に続く非定形節の主語である PRO の先行詞として解釈できる。例えば，（ia）は「靴を履かないまま，そのゲームをやった」と解釈される。

3） 受動文における潜在項が二次述語と叙述関係を形成する例として，次の用例を挙げる先行研究もある。

（i） a. The book was written drunk.
b. At the commune, breakfast is usually eaten nude.
c. The song must not be sung drunk.
（Collins（2005：101））

しかし，これらの用例における nude や drunk は二次述語では無く，動詞句を修飾する副詞として機能している可能性がある（Chomsky（1986：211, note 61））。また，Williams（1985：309）は，この様な受動文における二次述語が潜在項ではなく，主語と叙述関係を形成する可能性を示唆している。（i）をどのように分析するかは今後の課題とする。

4） 同様な対比は，主節主語が数量詞句の場合にも見られる。

(i)　a.　Every journalist wants to interview the president.
　　b.　Every journalist wants the president to be interviewed.

(Bruening (2013 : 19))

文（ia）では，不定詞節内の動詞 interview の動作主は，主節主語である数量詞句 every journalist として解釈される。他方，（ia）では，主節主語 every journalist は，不定詞節内の動詞 interview の動作主として解釈できない。この文では，大統領にインタビューする人は不特定な人物として解釈される。

5）　同様な対比が，数量詞句を先行詞にする場合にも見られる。

(i)　a.　Every journalist wants the president to be interviewed.
　　b.　Every journalist hopes that a conversation with the president will be forthcoming.

(Bruening (2013 : 19-20))

動詞 converse から派生した名詞句 conversation が従属節内の主語となる（ib）においては，その動作主として主節の主語 every journalist を解釈できる。他方，（ia）の受動文では，主節の主語 every journalist は，不定詞節内の動詞 interview の動作主として解釈できない。

参　考　文　献

Alexiadou, Artemis (2001)　*Functional Structure in Nominals : Nominalization and Ergativity*, Benjamins, Amsterdam.

Alexiadou, Artemis (2009)　"On the Role of Syntactic Locality in Morphological Processes : the Case of (Greek) Derived Nominals," *Quantification, Definiteness and Nominalization*, ed. by Anastasia Giannakidou and Monika Rathert, 253-280, Oxford University Press, Oxford.

Alexiadou, Artemis, Elena Anagnostopoluso and Florian Schäfer (2015)　*External Arguments in Transitivity Alternation : A Layering Approach*, Oxford University Press, Oxford.

Baker, Mark, and Kyle Johnson and Ian Roberts (1989)　"Passive Arguments Raised," *Linguistic Inquiry* 20, 219-251.

Borer, Hagit (2013)　*Taking Form*, Oxford University Press, Oxford.

Bruening, Benjamin (2013)　"*By* Phrases in Passives and Nominals" *Syntax* 16, 1-41.

Chierchia, Gennaro (1989)　"Structured Meanings, Thematic Roles and Control," *Properties, Types and Meanings II*, ed. by Gennaro Chierchia, Barbara Partee and Raymond Turner, 131-166, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

Chomsky, Noam (1986)　*Knowledge of Language : Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York.

Chomsky, Noam (2001)　"Derivation by Phase," *Ken Hale : A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.

Citko, Barbara (2014)　*Phase Theory : An Introduction*, Cambridge University Press, Cambridge.

Clark, Robin (1990)　*Thematic Theory in Syntax and Interpretation*, Routledge, London.

Collins, Chris (2005)　"A Smuggling Approach to the Passive in English," *Syntax* 8, 81-120.

Fu, Jingqi, Thomas Roeper and Hagit Borer (2001)　"The VP within Process Nominals : Evidence from Adverbs and the VP Anaphor *DO-SO*," *Natural Language and Linguistic Theory* 19, 549-582.

Jaeggli, Osvaldo A.（1986）　“Passive,” *Linguistic Inquiry* 17, 587-622.

Kratzer, Angelika（2009）　“Making a Pronoun : Fake Indexicala a Windows into the Properties of Pronouns, *Linguistic Inquiry* 40, 187-237.

Landau, Idan（2013）　*Control in Generative Grammar*, Cambridge University Press, New York.

Reinhart, Tanya（2016）　*Concepts, Syntax, and Their Interface : The Theta System*, MIT Press, Cambridge, MA.

Roeper, Thomas（1987）　“Implicit Arguments and the Head-Complement Relation,” *Linguistic Inquiry* 18, 267-310.

島　越郎（2018）「コントロールとフェイズ」『東北大学文学研究科研究年報』 67 号，1-19, 東北大学大学院文学研究科

島　越郎（2019）「コントロールの移動分析とその問題点」『東北大学文学研究科研究年報』 68 号，137-158, 東北大学大学院文学研究科

島　越郎（2020）「潜在項としての PRO」『東北大学文学研究科研究年報』 69 号，201-227, 東北大学大学院文学研究科

Williams, Edwin（1985）　“PRO and Subject of NP,” *Natural Language and Linguistic Theory* 3, 297-315.

On the Interpretation of Unpronounced Subjects in Nonfinite Clauses, Passives, and Nominalizations

SHIMA Etsuro

One of the central theoretical questions in generative grammar is how to explain interpretation of sentences involving non-overt expressions. Various analyses of this problem have been proposed : they are abstract entities that are pragmatically inferred in specific situations, they are elements of conceptual structures, or they are syntactically represented categories. In this paper, I will consider unpronounced subjects in nonfinite clauses, passives and deverbal nominalizations which have quite definite and distinctive properties. I will try to provide a unified analysis of them by proposing that they are all variables but their antecedents are determined at different components of grammar : variables in passives are saturated in the lexicon, whereas the ones in nonfinite clauses and deverbal nominalizations are assigned their antecedents in the syntax, according to the phase impenetrability condition proposed by Chomsky (2001).